

開会挨拶

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-10-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 和敬 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1918

開会挨拶

武蔵野大学副学長
同大学しあわせ研究所副所長

石 上 和 敬

石上 今、ご紹介いただきました石上^{いわがみ}でございます。主催者を代表いたしまして、開会のご挨拶をさせていただきます。本日は武蔵野大学のしあわせ研究所と法学研究所との共催によりますシンポジウム、『高齢者学から実践へ - 「古稀式」の開催に向けて - 』にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。オンラインでの開催ということになりまして、いろいろと制約も多いことかと思いますが、素晴らしいご講演者の先生方をお招きしてのシンポジウムでございますので、必ずやご参加いただいた皆さまにとって有意義な学びのお時間となることと思っております。最後まで、じっくりとご視聴いただければと思います。

さて、はじめに、本シンポジウムの意義、とりわけこのしあわせ研究所と法学研究所との共催となっている事情についてご説明させていただきます。超高齢社会を迎えるわが国におきまして、さまざまな分野で高齢者問題が重要な課題の一つになっていることは私が申し上げるまでもございませんが、本学の法学部法律学科と大学院の法学研究科を包括する法学研究所におきましては、本日、司会をおつとめの樋口範雄先生がご着任して以来、前法学部長で現法学研究科長の池田眞朗先生のリーダーシップの下に高齢者法の分野の研究を重視し、また実践拠点としての取り組みにも注力され、当該分野の教育研究が法律学科と法学研究科の一つの中心となってきました。

その成果の一つは昨年開催されました、法学研究所主催のシンポジウム

『高齢者とビジネスと法』というシンポジウムに結実されたかと思っております。一方、本学のしあわせ研究所でございますが、これは大学のブランドステートメントである『世界の幸せをカタチにする』という理念を具現化するべく、西本照真学長の陣頭指揮の下に多くの教職員がしあわせ学の研究および実践に努めている研究組織であります。すなわち、しあわせ研究は本学の象徴ともいえる教育研究分野となっております。本シンポジウムのテーマであります、高齢者学は広範な学問分野を横断する学際的な性格を有する分野であると同っておりますが、目指すところは究極的には高齢者の幸せを追求することであるかと思っております。このことを考えれば、高齢者法を中心に高齢者の幸せを研究している法学研究所と、しあわせ学をテーマに研究実践を進めているしあわせ研究所とが共催するということは、両者が出会うべくして出会った、本学ならではのユニークな一つの形といってよいかもかもしれませんし、高齢者学としあわせ学の双方にとって大きな刺激を与え合うものではないかと思っております。

しあわせ学の観点から

しあわせ学の観点からもう一つ言わせていただくならば、高齢者が幸せであることは一人高齢者だけの喜びにとどまらないという点でございます。後に続く若い世代も、いつかは高齢者になっていくわけですから、若い世代の人々にとっては自分の高齢期が幸せに満ちたものであるという期待と確信を持って過ごせる生涯というのは、いわゆる老後の不安もなく、高齢期に希望を持って人生を歩んでいけるということでもあり、その意味で全ての世代の人々の幸せにも通ずることになるかと思えます。また、幸せな高齢者が豊かな人生経験や、蓄積してきた知見を若い世代へ伝え、若い世代がそれを活かしていけるようになることは、高齢者と若い世代の方々、双方にとって、もっと言えば社会全体にとっても有形無形の大きな利益を

もたらすことにもなるかと思えます。

このように高齢者の幸せは社会全体の幸せにも通ずるものであると考えることで、高齢者の幸せを追求する大きな意義を見いだしていけるのではないかと思います。本シンポジウムでは、今日、高齢者学に関わられる4人のご高名な先生方をお招きしております。先生方のご紹介は先ほど樋口先生がしてくださいましたが、このようなすばらしい先生方のお話を、一つのシンポジウムの中で合わせて拝聴できるということは、これは大変、稀有にして貴重な機会、言ってみれば大変ぜいたくな学びのご縁ということであり、興奮すら、覚えております。どうか、ご登壇いただきます4人の先生方、何とぞよろしくお願い申し上げます。

古稀式について

なお、本日のシンポジウムでは先ほどお話もありましたが、「古稀式の開催に向けて」というサブタイトルを付けさせていただいております。この古稀式というのは、本年9月に本学の武蔵野キャンパスで開催されるイベントでございまして、地域の高齢者の方々を広くお招きして、本学の高齢者学の成果を存分に享受していただくことを目指すものでございます。本日のシンポジウムを9月の古稀式につながる流れの中にしっかりと位置付けたいという思いからサブタイトルに掲げさせていただきました。

仏教、インドの観点から

最後に、私自身の専門の立場から一言申させていただきます。私の専門は仏教学でございまして、実家のお寺を住職として預かる立場にもございます。私が身を置いております仏教界は、超高齢社会を先取りしたような一面があると思っております。高齢のお坊さんたちが元気に活躍してい

る世界です。一例を挙げますと、比叡山、ここは天台宗ですが、比叡山のトップは天台座主と申しまして、これは宗派を超えて仏教の象徴的な地位と言ってもよいかと思いますが、先日、現役のまま 96 歳の天台座主が亡くなりましたが、その後を継いだのが、今度は 97 歳の高僧でありました。仏教界はそのぐらいまで長生きしませんとなかなかトップにはなれないということなのかもしれませんが、仏教界には高齢期を幸せに過ごせる何かヒントもあるのではないかと、このように普段から考えております。

それから、もう一つ。仏教はインドが発祥ですが、古代インドにバラモン教というのがございまして、仏教が始まる前からございました。このバラモン教では人生を四つのステージに分けて段階的に歩いていくことが理想とされました。四つのステージとは何かと申しますと、現代風に引き寄せて解釈するならば、第 1 ステージは学生期といいまして、お勉強の時期。第 2 ステージは家に住ると書いて家住期といいまして、これはお仕事ですとか、家庭、子育て、そういうことに当たる時期です。ここまでは大体イメージが湧きますが、お仕事や子育てが一段落したら、頭に白いものが目立ってきたり孫の顔が見えたら、仕事や家庭に一段落をつけて、そして森や林に住まいを移して、そこから心の問題とか、哲学的・宗教的な問題に正面から取り組む時期に入るとされます。これが第 3 ステージでございまして、林に住むと書いて林住期、林棲期とも呼びます。このような第 3 ステージ、プチ出家のようなイメージかもしれませんが、ここからが人生の本番であると考えられることもできるでしょう。最後の第 4 ステージはまったくの宗教的な生活に入るということで、そこまでいかどうかは個人差もあったようですが、いずれにしましても、人生を四つのステージに分けるといふ古代バラモン教の考え方のポイントは、仕事や家庭のことが一段落ついたら、そこから先が人生の意義などを考えていく人生の本番であると、こういう考え方を読み取ることができる点ではないかと思います。これは、これからの高齢社会の在り方を考えていく上でも何かしらの、ヒン

トになる部分でもあるのではないかと思います。

最後に駄弁を弄してしまいましたが、仏教界が超高齢社会であるということと、古代インドのパラモン教に人生を四つのステージに分ける考え方があったということを情報提供させていただき、開会のご挨拶にさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

樋口 ありがとうございました。それでは、早速シンポジウムの内容に入りたいと思います。一応、皆さんも一緒ですけれども、こういう超高齢社会と一緒に生きている人たちの中でいろんな面を見てこられているわけで、そういうお話をしていただければいいと思っているんですが、最初に秋山弘子さんからお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。